

# マスコミ研究40年

## A Recollection of My Studies in Mass Communication

竹内 郁郎  
TAKEUCHI Ikuo

※このレポートは、2000年3月退職された社会学部竹内郁郎教授の最終講義（1月11日、東洋大学白山キャンパス）をまとめ、一部加筆修正したものです。

### 1. マスコミ研究までのまわり道



私がマスコミ研究の門をくぐったといえますか、マスコミを本気で勉強しようと思い始めましたのは、1955年、昭和でいいますと30年でした。そこで、現在まで数えますと45年になるのですが、ここ最近5年くらい何もやっていないから、あるいは途中で5年ぐらいいは休んでいるときもあったから、まあきりのいいところで40年ということにさせていただきました。

1955年に私は文学部の社会学科を卒業しまして、大学院に入ったわけです。その当時東大の大学院は社会学専門課程が2つのコースにわかれていまして、ひとつは社会学プロパーの専門コース、それからもうひとつは新聞学といってマスコミを専攻するコースになっていました。私はその新聞学という方へ進んだわけなんです、この大学院に進学をした頃のことを振り返ってみますと、今皆さん方の前で自分がマスコミ研究者だなどと言うのも恥ずかしいほどに、なんか行き当たりばったりだったことを覚えております。それまで大学に残ったり、あるいは研究者になったり、ましてや大学の教授になろうなんていうことは夢にも思ったことはありませんでした。また、親類縁者見回しても誰一人そんな人はおりません。

それじゃあ何でそういう羽目になったのかということからお話をしたいと思うんですが、まずその前に、私が生まれたのは1929年、昭和でいうと4年です。当時の社会状況を考えてみますと、世界大恐慌のあと日本はまさに戦争一色なわけですね。そういうなかで軍国少年として育ったわけです。この時代のことを回想して詳しく書かれたものとして、ベストセラーになった妹尾河童さんの『少年H』という本がありますので、お読みになった方もあるかと思います。私が生まれて2年経った1931年には満州事変というのが起こります。いわゆる15年戦争の始まりです。また小学校の2年生の

1937年には日中戦争、当時支那事変といましたが、日中戦争が起こります。それから小学校の6年生の1941年には、当時大東亜戦争といましたが、太平洋戦争の勃発です。戦争がどんどん拡大していく時代背景のなかで、まさに少年時代は軍国少年として育ったわけです。

従って、当時私は自分が軍人になる、兵隊さんになるという以外に将来を考えることが出来なかったわけです。高等学校に行こうとか、大学に進もうとかということは、全然考えなかった。とにかく兵隊になるということだけです。で、どうせ兵隊になるのならば、なるべく早くなおいた方が後々いいということで、1943年、当時13歳でしたが、中学校の1年生を終えた時に、陸軍の将校を養成する学校に入ります。ここで日夜軍事教練などをやっていたわけですが、やがてご承知のように1945年に戦争に負けて、軍の学校も廃校になってしまいます。軍の学校で鍛錬してた頃は、人生20年というふうにいわれていたし、自分でもそう決めていたわけですね。まあ20歳になるまでにおそらく戦死しているだろうと。現に私の4つ5つ上の人たちは当時特攻隊という、片道だけの燃料を積んだ飛行機で敵の軍艦に体当たりをして何人も亡くなっております。そういうことで人生20年というのは観念ではなく現実だったわけですので、戦争が終わったときは15歳でしたが、これから何をどうやっていいのかわからないわけです。とにかく目標を喪失してしましまして、学校へ戻るほかないということで、旧制の中学校から高等学校へ進んでいくわけですが、もともと軍人になるつもりですから、体を動かすということが得意で、机に向かって勉強するよりは何か体を動かす仕事をしたいということで、今から思うと噴飯ものなのですが、新劇の俳優になろうと思ったんですね。芝居をやりたくてしょうがなかった。で、実際に新劇の先輩の所に行って、どうやったら俳優になれるんだろうかということを相談したりいたしました。ですから、その希望が叶ってれば、今頃は性格俳優が何かで活躍をしていたか、あるいはどこかのどき回り劇団に入って、田舎をまわっていたかだろうと思います。私とちょうど同い年の人で、ちょっと親しくしている新劇の俳優がいるんですが、その人はテレビに出てくるようなこともなく、ときどき舞台に出演する程度です。あるとき芝居の役がまわってきたから是非観に来いというんで、切符を買って期待して行ったんですが、第何幕目にちょこっと出てきて、「あっはっはっ……」と笑って引込んでそれで終わり、というような役なんですね。私もひょっとしたらそういうことで一生を暮らしていたかもしれないと思います。

ところが、この新劇俳優志望がまた挫折をするわけですね。といいますのは1949年、つまり当時の旧制の高等学校の3年生の時、来年は卒業というときに、当時の若者に一般的だった結核という病にかかりまして、それもありひどかったもんですから、一年間療養せざるを得なくなってしまう。漸く少しよくなって、翌々年ですか、1951年に大学に入るわけですが、入って一年したらまた再発して、今度はカリエスという背中の骨に結核菌が巣くってしまったという病気なんですね。そこでまたギブスベットという石膏のベットの上に一年間上を向いたまま、体を動かすことが出来ずに過ごさざるを得ない状態になってしまいました。一年後に起きあがったんですが、腰から肩まで

のセルロイドの堅いコルセットというのをはめた生活を5年余り続けなければならないというような状態でした。

幸い当時新しい薬が発見されて、結核の方は少しずつよくなりまして1955年になんとか学部を卒業します。ここで一番最初の話に戻ってくるわけですが、学部を卒業したものの、そういう体では就職も出来ない。現在ほどではないけれども、当時もやはり就職難でして、特に文学部なんてところでは、3月のぎりぎりまで就職先が見つからないという人も少なくなかったような状況で、ましてや病み上がりの半病人なんかには就職の口なんていうのはまったく考えられない。そこで大学院に入ったという、そういう経緯なんですね。

ただ先ほども申しましたように、大学院にも2つコースがあって社会学専攻というのは、これはまあそうそうたる卒業生が入っていったわけです。私などはどうていそういう人たちと轡を並べていくことは出来ないし、まず入れるかどうか分からない。たまたま新聞学専攻というマスコミ研究のコースの方は志望者がおりませんで、私一人だったんですね。一人だったものですから、上手く滑り込むことができたということで、まあ結局私が1955年に大学院に進学したというのは、消去法あるいは受け身的な選択の結果で、よく教師にしかねない、教師でもやるほかない、というのを「でもしか教師」というふうに言うそうですが、まさに「でもしか教師」の典型みたいなものなわけです。

## 2. 1955年当時の社会状況と『社会心理学』

そこでまた当時の社会状況というものをちょっと振り返ってみますと、敗戦後ちょうど10年ですね。10年たってもまだまだ戦争のいろんな意味での残りがその辺に漂っていました。阪神大震災から5年経ってもまだ完全な復興がなっていないというふうに言われておりますけれども、当時は阪神地方といった一局地じゃなく、日本全体が爆撃で廃墟と化している、そういうところからの復興ですから、10年たってもまだまだいろいろなところで戦争の傷跡が残っている。世界的にはアメリカとソ連の間の冷戦状態が続いている。1950年には朝鮮半島で南北間の戦争が起こり、やがて38度線を境に膠着状態のままになっている。それから私の卒業する前の1954年の3月にはビキニ環礁というところでアメリカが水爆実験を行い、日本の漁船が被爆をして乗組員の一人が亡くなるという、悲惨な出来事が起こっている。51年には平和条約が結ばれたわけですが、まだ国連に加盟することさえ許されない。国内では生活安定といった状態にはまだまだ遠く、食料は相変わらず充分ではなかった。

NHKの当時の世論調査のデータを見ますと「現在暮らしで一番困っているのは何ですか」という質問に対して、一番多い答が「食」、それから「着るもの」、「住宅」といった順で、食べるものに一番困っている。今おそらく「何が一番困っていますか」という言われて「食べ物」がトップにく

ることはまず考えられません。当時はまだヤミ米といったものも続いておりましたし、それから現在の若い人はまったく見たこともないでしょうが、傷痍軍人という戦争で傷ついた兵隊さんが病院の白衣を着てですね、街頭で傷をさらけ出して、みんなからなにがしかのお金をもらおうというふうな姿、電車の中に傷痍軍人が乗ってきて物乞いをするというような、そんな情景がまだまだ残っておりました。

しかし一方、ちょうどこの頃から経済復興が始まったことも事実でして、1955年暮れにはいわゆる「神武景気」が始まり、1956年の経済白書で有名な「もはや戦後ではない」という言葉が出てくるわけですね。生活面でも少しずつ少しずつ新しい製品の開発が進められておまして、昨日ちょっと調べてみたら、1955年の8月にトランジスタラジオが発売されています。今ではトランジスタラジオでさえ時代遅れになってしまいましたけれども、それまでは真空管を使ったラジオが普通でした。それから12月には電気でご飯を炊けるという電気釜が現れてきます。これも今ではもうまったく当り前のことになっておりますが、45年前にはじめて開発されたんですね。その翌年1956年3月には、2DKという新しいタイプの建物が日本住宅公団で初めて建てられて、「団地」という言葉が生まれています。まあそういう時代で、少しずつ生活も向上してきた。政治的には自民党と社会党の二大対立政党が発足し、いわゆる1955年体制が生まれる。マスコミ状況についてみると、2年ほど前の1953年にテレビ放送が本格的に開始される。放送が開始されたときのNHKの受信契約者の数は何件くらいだったとお思いになりますか。実に866世帯、つまり日本全国で、テレビをNHKと契約して受信した世帯が866しかなかったんですね。当時17インチという今でいえば非常に小さな白黒テレビも15万円くらいしたわけですから、多くの日本人にとってはまさに高嶺の花だったといえましょう。ですから、当時のテレビ視聴の主要な形というのは街頭テレビ、街の公園だとか駅だとかそういうところに大きなテレビが置かれていて、人々はそこに集まって、テレビを立ったまま見るというものでした。人気の番組は何といっても力道山のプロレスで、彼の得意技の空手チョップで大きな外人を打ち倒すシーンになると、駅の構内などどよめきと歓声に充ちたものでした。まあ、こんなこといっても若い人たちはほとんど関心はないだろうし、年寄りにはまたかというふうな気持ちだと思いますので、この辺にとどめておきますけれども、要するに戦後から戦無といいますが、戦争の影が人びとの意識や生活の中から少しずつ消えていく時代への転換期というのが、私が大学院へ進んだ頃だというふうに思っております。

戦争の傷跡が少しずつ消えていくと同時に、アメリカの対日政策というものが少しずつ変わってきます。特に先ほど言いました1950年の朝鮮事件をきっかけにして、日本に軍隊を作るという方向に変わってくるわけです。戦後数年間は日本の軍事力を解体して、占領軍司令官のマッカーサーの言葉によれば、日本をスイスのような永世中立の国にするんだということで進んでいたわけですが、この頃からソ連、中国の脅威に対抗するために、日本に軍隊を持たせるということがアメリカの対日政策になりまして、1952年には保安隊、1954年には現在の自衛隊が生まれてまいります。

それから、戦後すぐには、戦争中に指導的な立場にあった人あるいは軍国主義的な言論活動をし

た人々は、公の職業に就けない、公職から追放するということでパージが行われたわけですが、この頃からはむしろそういう人たちが社会的に復帰し始めて、反対に左翼的とみなされる人、とくに共産党関係の人たちが公職や職場からどんどん追放されるという、レッドパージと呼ばれる動きが一般化してくるわけです。逆コースと当時呼ばれていた動きです。

マスコミはこういう動きに対して、時々批判的な論調を示しているのですが、大勢としてはその流れに結果的に荷担をしていく、少なくとも社運をかけてまでそういう流れに反対するという姿勢は示されなかったわけです。戦争中の新聞やラジオの報道、あるいはキャンペーンに対して、当時の多くの国民は、すっかり騙されていたという不信感を強く持っていました。つまり新聞やラジオで、日本は連戦連勝、敵アメリカは大きな損害ばかり蒙っている、だから、今に日本は勝利をおさめるんだといった報道が、繰り返し繰り返し行われていて、素朴な多くの国民は、それを本当だと信じて、戦災や窮乏にも耐えていたわけですね。ところが戦争が終わってみたら、これがみんな嘘だった。日本は昭和17年のガダルカナル島あるいはミッドウエイ海戦での敗北を境にして負け戦の連続だった。現に日本の都市のほとんどが爆撃でやられているし、沖縄では中学生までが戦闘に駆り出されて悲惨な最期を遂げている。戦時中の報道がほとんど全部嘘だったということが人々の頭の中にまだ生々しい形で残っていたんですね。それだけにいわゆる逆コースと呼ばれるような動きに対して、またああいう時代に逆戻りするんじゃないかという不安や警戒の気持ちが強く、そうした気持ちの反映として、マスコミは一体何をしているんだ、また戦争中のような情報操作を行っていくのではないかというふうな、恐れを抱いたわけですね。当時のマスコミ研究者の人たちも、人びとの気持ちを背景に、新聞やラジオ、テレビに対する批判的な姿勢というものを強く持っていて、私がマスコミ専攻の大学院に進むのにも、そういった研究者の著作というものに触れたということが、非常に大きな刺激になっていたということは否定できません。

そうした著作のなかでも代表的な、少なくとも私にとって非常に影響を受けた本が、清水幾太郎という学習院大学の先生の書かれた『社会心理学』という本です。清水先生という人に対してはいろいろな批判がありまして、晩年の活動にはいろいろ問題が確かにあるわけですが、しかし当時書かれた『社会心理学』という本の価値というものは、私は今でも非常に高いものだというふうに考えております。実際その本を読んだことがきっかけになって、マスコミに関心を持ち、マスコミを勉強するようになった学生達がたくさんいたということも事実であります。

この本の内容をごく簡単にご紹介すると、ひとつは環境の拡大という問題です。昔は自分たちの周囲のごく限られた場所だけが生活の場つまり環境だったのが、社会の近代化と共に、どんどんその範囲が広がってきて、国全体あるいは世界全体が自分たちにとって意味をもった環境になってくる。ところがそうした広大な環境は、そのすべてを直接自分たちの目や耳や肌で体験するということは出来ないわけですね。つまりアメリカの政治にしても、あるいはヨーロッパの情勢にしても、最近の問題でいえばコソボの問題にしても、チェチェンの問題にしても、そういうところで紛争が起こっているということを私たちは知っていますし、また、それらの紛争の背景にある民族とか宗

教の問題が、われわれ人類にとって重要な問題であることも、それなりにわかるわけですが、しかしその場へ直接行って自分の体で体験するということは出来ない。では何故そういう事態が自分たちの環境として認知出来るのかといえば、それはテレビの報道や、新聞の報道、そういうマスコミの報道を通じて可能なわけです。つまり、実在してはいるけれども我々が直接体験できないものを、我々の環境として意味づけてくれるマスコミというのは、実物のコピーを私たちに提供してくれているんだということなんです。別の言い方をすると、私たちはマスコミが提供するコピーを通じてしか、実物の環境について知ることができないというわけです。そこで、コピーが実物を忠実に写してくれているのなら問題ないけれども、現実にはそうはならない。そこにある実物をそのまま全部伝えるというわけにいきませんから、なんらかの形で取舍選択をしなきゃならない。その選択過程の中では省略ということもあるでしょうし、抽象化ということも当然起こってくるでしょう。あるいは誇張、時には歪曲ということも出てくるだろう。さらには、マスコミが特定の権力に掌握される、あるいは商業主義的な営利企業によって運営されるといった事態のもとでは、コピーの歪みは非常に大きな問題をはらむことになる。ということで、近代化に伴う環境の拡大に応じてその環境のイメージをコピーとして我々に伝えてくれるマスコミというものの持っている問題性というものが、この本の中で強く指摘されているのです。

この『社会心理学』という本の中で書かれている、もうひとつの重要な問題点は、社会の近代化に伴う分化に関係しています。昔は家族とか共同体といった集団ないし組織が、その中に沢山の機能、宗教とか教育とか裁判とか防衛といった機能をすべて含んでいた。それが社会の近代化と共にそれぞれの機能を単一的に担う集団や組織が出現して分化していくわけです。このことについては社会学の方ではジンメルとかデュルケムなどが以前から詳しく分析してきたわけですが、分化は社会や人類にとっての合理的な進歩であると同時に、人間を全体としてあたたく包み込んでくれる集団の解体という側面をもっている。人間はそのときどきの必要に応じて、異なった機能を持った集団を次々に渡り歩かなければならないわけです。しかも、そうした異質の集団や組織に自分を分属させながら、一個の人間としてのアイデンティティを確保していかなければならない。それぞれの機能集団の間に調和が保たれている間はよいけれど、利害の食い違いや対立が生じた場合には、自我も分裂しかねなくなってしまう。分化という近代化現象は、こうしたネガティブな側面もあるわけです。さらに、機能集団は政治の場でも産業経済の場でも、さらには文化の場でも、どんどん巨大なものになっていき、そこに所属している人間は、お互いに連帯を失った、砂粒のようなバラバラな存在になってしまう。これは大衆社会論というふうにいわれている社会学の理論のなかで論じられていることですが、たとえばカール・マンハイム、エリッヒ・フロム、デヴィット・リースマンといった人たちの著作が当時次々に紹介されていました。清水先生も社会的分化がやがて社会的分裂をもたらす、新しい群衆ともいべき現象が生まれてくるという大衆社会論を、この『社会心理学』の中で展開しておられます。

一方に、検証不能なコピーを提示しつづけるマスコミがあり、他方に、バラバラな存在として無

力なままにマスコミに曝されている大衆が存在するという構図が、当時のマスコミ研究者たちの問題意識に内在しており、私もまたそうしたイメージを抱きながら、駆け出し研究者としての歩みを始めたというわけであります。

巨大なマスコミの力に対抗してコピーの虚偽性をあばき、正しい環境像を持つためにはどうすればよいのかという問いに対して、当時いわれていたのは、一つには個人個人のかけがえのない体験、つまり、日々の生活の中で培われた経験を大事にしよう、そういう実体験に照らして不合理と感じられたり、間違っていると思われるようなマスコミ報道に対しては、眉に唾つけてきちんと疑ってみようじゃないかということです。日々の実践的な生活を通じて作りあげられた体験こそが譲ることのできない砦であり、何にもまして大切なことなんだと、これを大事にしようと、そういうことが言われていました。これは戦争中の、先ほど言いましたようなマスコミ報道にひどく裏切られた体験というものが底にあって、もう二度と騙されまい、いくらうまいこと言われたって、この自分の体験をもとにして本当か嘘かを見分けていくほかないんだという気持ちが、人々の心の中に残っていたということだろうと思います。

もう一つは、そういう個人の力だけではやはり限界があるので、共通の生活体験を持った人たちと一緒に、そういう人たちとの結びつきを大事にしながら個々の体験を更に確実なものにしていこうということです。お互いに補いあう集団の力によって、マスコミの力に対抗していこうということです。当時日本では全国的にサークル運動というのが非常に活発でした。このサークル運動というのは今の部活のようなサークル活動とは違っておりまして、労働組合だとか、革新政党、あるいは地域の運動体といった組織を核にした活動です。勉強会をすとか、あるいは労働歌や革命歌を中心とした歌声運動とかいったものが当時盛んでしたけれども、そうした活動を通じて、自分たちの体験というものをただ単に個人的なものだけにとどめず、みんなのものにしていく、共通体験として確実なものにしていくという狙いをもっていました。マスコミの嘘を暴いていくうえでも、個々人の体験だけによるよりは、こうした運動を通じて行えばもっと効果的になるというわけです。私が1955年にマスコミを勉強しようというふうに思い始めた頃はこんな社会状況でした。

### 3. アメリカのマスコミ研究の受容

当時マスコミ研究が最も精力的に行われ、いろいろな成果が蓄積されていたのは、アメリカでした。現在もアメリカは確かに盛んですけれども、少しずつヨーロッパの方に重点が移ってきているように思われます。いずれにせよ、当時は圧倒的にアメリカですね。当時社会学はAmerican Scienceとよばれることがあり、まさにアメリカの学問だというふうにいわれていましたけれども、マスコミ研究はそれに輪をかけてAmerican Scienceだったといつてよろしいかと思います。もちろん戦争中はそういうことはわからなかった。その戦争中の空白を埋めようとして、戦後アメリカの研究がど

んどんどん紹介されて入ってきます。日本の研究者も精力的にアメリカのマスコミ研究を紹介してくれていまして、私など駆け出しの勉強をしているものには大変に有り難かったわけですね。先ほどの清水先生もそうですし、まだご存命の心理学者の南博先生、それから私の恩師でもあります日高六郎先生というふうな方々が、マスコミ研究のアメリカの状況というものをいろいろ紹介して下さった。

「でもしか研究者」の私としても、人並みに追いついて行くためにはこういう方々によって紹介された原典を読んでいかなければならないということで、いろいろ苦勞して読んだわけですが、そうした本の中で、私が特に影響を受けたと思っているのは、ひとつは社会学あるいは社会心理学の観点から、主として社会調査という実証的な方法を使ってマスコミの影響力を研究した一連の文献です。戦争中にナチスに追われてウィーンからアメリカへ渡ってこられたポール・ラザースフェルドというコロンビア大学の先生ですが、この人が1940年頃からたくさんの著作を出されます。共同研究を組織されてそのリーダーとしてたくさんのお弟子さんを育てた非常に優れた方ですが、このラザースフェルド達のやった実証研究の報告書をかなり丹念に読みました。研究のテーマとしては、大統領選挙の際の投票行動にマスコミのキャンペーンがどのくらい影響を持つだろうとか、あるいは当時のラジオを人々はどんな風に聴いているんだろうかといったことで、その後のマスコミ研究を大きく方向づけた成果がたくさん盛りこまれています。最近、ウィルバー・シュラムという人が書かれた本を見ますと、ラザースフェルドという人は、たくさんのお弟子さんを育てたと同時に、研究のために資金を外部から導入するのに大変優れた才能を持った人だったということです。日本の研究者も、今ではだんだんそういう風なファンドの獲得を重視するようになっていますが、かつてはそういう外からの金には何か裏があるのではないかとといった疑念を持ち、外部の企業などから研究資金をせせと集めてくる先生というのはあまり尊敬されなかった気味があるんですけれども、よい研究を進めるためならばそれも必要なことだ、むしろよい研究だからこそ金も集まるのだというのが、アメリカ流の考え方だといえるでしょう。確かにラザースフェルドは当時のCBSからの委託で、たくさんの研究業績をあげております。それらの内容については時間も限られていますので、紹介は省かせていただきます。今では日本語のテキストなどでもいろいろと紹介されていますので、それらを読んでいただくことにしたいと思います。

もう一つはですね、これは心理学、主として実験心理学なんですけれども、そういう心理学の立場から非常に厳密な実験的な手法を使って、マスコミの効果というものを分析した研究で、これはエール大学におりましたカール・ホヴランドという学習心理学の先生が中心になって行われたものです。ホヴランドらは戦争中に陸軍に頼まれまして、新しく軍隊に入ってきた新兵さんを、どうしたら、戦闘意識をもった一人前の兵士に育成することが出来るかということを課題にして、いろんな実験研究を行った。その報告書が、『マスコミュニケーションの実験』という題で出版され、それから更にそれを敷衍した形で、『コミュニケーションと説得』という本が出された。これを読みまして私は本当に愕然としたというか、研究っていうのは本当はこういうものなのかということを、つ

くづく感じてショックを受けました。ホヴランドらの研究っていうのはですね、ある仮説を立て、非常に厳密な統制実験をして結果を出す。その結果を理論化すると同時に、そこからまた新しい問題を発掘して変数を取り上げ、仮説を構成する。そしてまた厳密な実験を行ってその仮説が検証されると、さらに新しい仮説を作り出していく。そういうふう非常に緻密で、そしていかにも頭のよさを感じさせるんですね。ラザースフェルドたちの研究にも、仮説の設定とその検証の積み重ねという手堅さがありますけれども、私は心理学というものを知らないで初めて心理学の立場からする研究書を読んだものですから、心理学というものに対してコンプレックスを持ちちゃいまして、それが未だに尾を引いて、心理学の先生っていうのは大変偉い人だというふうに思う癖がなかなか抜けておりません。とにかく当時は非常にショックを受けました。

ラザースフェルドにしてもホヴランドにしても、当時はまだ日本語に翻訳されたものがありませんでしたので、原書で読むほかないわけですがけれども、高くて大学院の学生なんかにはとうてい手が出ない。新聞研究所という東大の研究所の図書館から借り出すわけですがけれども、辞書を片手にノートを取りながら読むんですから、なかなか進まない。今でしたら先ずコピーをしちゃうんでしょうけれども、コピーなんてものはないわけですね。一度だけどうしても必要に迫られて調査票の部分だけをコピーしようと思って、当時東大の中央図書館というところでコピーを受け付けてたんで非常に高いんですけども、やむを得ず頼んでしてもらいました。そうしたらどうなんでしょうね、未だに不思議なんですけれども写真の白と黒が逆になってる印画紙にコピーされてきた。つまり字が白くてですね、周りが黒い、そういうコピーなんです。これは未だに不思議なんですけれども、そういうコピーでもかなり高い値段ですから、そう気軽に頼むわけにいかない。仕方が無くノートをいちいち細かくとっていかざるを得ないんです。実は私去年引っ越しをして、これまでの本や資料をほとんどすべて整理をしてしまったので手元にないのですが、整理をしながら当時のノートを見ると、まあよくこれまで勉強したもんだと、我ながら感心するぐらいに細かくメモをしている。今ならコピーで済ますんでしょうけれども当時は手で写すほかなかった。これは確かに大変なことなんだけれども、いい点もあります。というのは、その後コピーが普及してくるにつれて、私なんかもずいぶんコピーを取るわけですがけれども、コピーを取るとそれでもう読んだような気になってですね、そのあとそれを丹念にノートを取りながら勉強するってことがおろそかになってしまう。ということで、学生時代のような金はないが時間だけはあるという時代には、なるべく一生懸命にノートを取っていくということがいいんじゃないかと思います。マスコミ研究40年のうちの最初の10年くらいのそうした蓄積が、後の30年の私を支えてきたという所もありますので、そういうことをやればやはりそれなりの実りはあるということでしょうね。

このほか細かいことはうんと省略しますがけれども、こういうアメリカを中心としたマスコミュニケーションの実証的な研究を読んでいますと、どうも当時考えていたようなイメージ、つまり、マスコミは非常に強大な影響力を持っていて、バラバラにされた無力な大衆には到底太刀打ちできない、つまり騙されまいぞと身をすくませるのが精一杯で、マスコミに対して積極的に対処するよ

うな力は全くないんだというイメージが、必ずしも正しいものではなさそうだとすることが、いろいろな調査や実験を通じて明らかにされてくるわけですね。そういうたくさんの研究の成果が1960年に、クラッパーという人の『マスコミュニケーションの効果』という本の中で集大成されます。これは翻訳も出ておりますので、学生諸君も読むことが出来ると思いますが、1940年代50年代に行われたアメリカでの実証研究の成果を非常に要領よく、また目配りよくまとめている、そういう本ですね。その結論は、マスコミからの刺激というのは決して個々の人間にストレートにインパクトを及ぼすのではなくて、むしろ、その人その人がすでにもっている意見だとか態度といったものによって篩にかけられたうえで、影響を及ぼして来るんだということです。従って、一人一人が現在持っている政治的な考え方だとか、意見だとかいうものを、マスコミの力によって右から左へ変えてしまうというようなことはむしろ異常なことなんだ、通常はほとんどないんだということになります。むしろ一般的に、それぞれの人がすでに持っている意見や態度をマスコミが更に補強していくような、そういう働きのほうが圧倒的に多いのだというふうなことが、結論としていわれてくるわけです。さらに、人々の意見や態度にインパクトを及ぼすうえで、家族とか友人とか仕事仲間といった人たちからのパーソナルな影響のほうが、マスコミよりもずっと強い力をもっているということもわかってきた。つまり、個人をとりまく身近な小集団の影響力がクローズアップされたというわけです。だから今までマスコミについて、巨大な力をもった恐るべき存在だとか、あるいは魔物のような存在だとかいうふうに考えていたイメージが、ここで180度とまでとはいわないにしても、大きく変わってきて、マスコミといったってそれを理解し、それを消化し、そしてそれを評価するのはやはり一人一人の人間なんだ、そしてそういう一人一人の人間が作っている小さな集団なんだというふうなことが実証的にも明らかにされてくる。そういう考え方をマスコミの「限定効果論」というふうに普通呼んでいますが、マスコミの力はそんなに万能なものではなく、一定の限界があるということです。それに対して、マスコミを魔物と考えたり、あるいは非常に大きな力をそれに付与したりしたそれまでの考え方は、「魔法の弾丸理論」あるいは「皮下注射的效果論」とよばれています。

クラッパーの本が出版された1960年に、私は大学院の5年の課程を終わるわけです。その時たまたま、東大の新聞研究所というところで助手のポストがあきまして、そこに何とか採用されることができたわけです。ここでもう他の道は絶たれたわけですね。もうこれからは研究者あるいは大学の教師になる以外ないんだという思いを定めちゃったわけです。たまたまその前年に、ここ東洋大学に社会学部が設置されまして、その初代の学部長に就任されたのが、新聞研究所におられた千葉雄次郎という先生でした。この先生は私の大学院生時代に大変にお世話になった方で、この方の人となりや業績については昨年出版された『東洋大学社会学部40周年記念論集』という本の中に書かせていただきましたので、読んでみてもらえれば幸せです。その千葉先生から声をかけていただきまして、社会学部に非常勤講師として1960年に採用されました。それから40年間、そのうちの31年間は非常勤講師として、そして最後の9年間で専任の教員として、東洋大学にお世話になってまいりま

した。ですから、私の研究者あるいは教師としての最初の方が東洋大学で、そして最後の方も東洋大学ということになります。あらためて御縁の深さを感じています。

#### 4. マスコミ研究の停滞と再生

ところで、1960年にマスコミの力というのはそんなにおそろしく大きなものではないという「限定効果論」が体系化されてからしばらくの間、実はマスコミ研究というのは停滞しちゃうんですね。つまり、調査研究を積み重ねた結果いろんなことがわかったけれども、結局はマスコミの影響力は精々その程度のところで、これから研究するとしてももう新しいことは出てこないんじゃないか、というわけです。そうしてその後10年くらいの間は、限定効果論を裏打ちするような調査が行われたり、あるいはそれが更に精密化された形で理論化されたりというふうなことが続くわけですが、バーナード・ベレルソンという人はすでに1959年の「コミュニケーション研究の現状」という論文のなかで、このへんのことを悲観的に述べています。ベレルソンによりますと、かつてマスコミ研究を指導した、先ほど私も名前を挙げましたラザースフェルドであるとか、ホヴランドであるとか、あるいは政治学の領域からハロルド・ラスウェルという人とか、またこれも心理学者でグループ・ダイナミクスという学問の創始者でもあるクルト・レヴィンという人たちが、大きな足跡を残しながらそれぞれ、マスコミ研究の分野から去って行ってしまったというんですね。たしかにラザースフェルドという人は調査方法論の精緻化に力を入れるようになっていきまして、マスコミ研究から足を洗ってしまう。たくさんお弟子さんを育てましたから、お弟子さんはマスコミ研究を続けているわけですが、ラザースフェルド自身は方法論の方に戻って行ってしまいます。それからレヴィンもですね、彼はコミュニケーションの研究の領域の中でもマスコミよりもグループ研究の方に重点をおくようになってしまいます。ホヴランドも、説得の研究以後そういうコミュニケーション研究はほとんどやってない。今ではそういう偉大な先人の残した遺産をただ食いつぶしている、そういう状態だと。まあ率直に言って不毛な高原状態が続いているという風な内容の論文でして、かなり大きなセンセーションを起こしました。日本でもよくこの論文が引き合いに出されて、マスコミ研究の停滞ということがいわれておりました。

ただ、当時の学問の世界といいますか、研究の世界ではそういう停滞状態が続いていたにせよ、現実のマスコミ状況というのはどんどんどんどん変わってきていたわけですね。特にテレビが急速に普及したということは大きい。先ほど、最初は866台の契約から出発したと紹介したテレビが、1959年にはですね、ミッチーブーム、ミッチーといっても浅香光代ではなくて、今の皇后の美智子さんですね。美智子さんが皇太子と結婚すると、初めての平民からの皇室入りだというようなことで、マスコミも騒いだし、日本中沸き立ったわけですが、その成婚のパレードが皇居から赤坂離宮まで、馬車で行われたのです。それをテレビが全部中継したんですね。そのミッチーブーム

でテレビが飛躍的に普及するわけです。それからどんどんどんどんその勢いは衰えずにですね、1965年、つまり発足して12～13年の間に、テレビの普及率は90%に達し、日本全国テレビのないところは無いというふうになってしまう。チャンネルの数もはじめ1953年にはNHKと日本テレビと2局しかなかったのですけれども、10年後の1964年にはもうほとんど現在の地上波テレビ局が出揃って、地方でもUHFの放送局がどんどん設立されて、全国的なテレビのネットワークが形成されて行く。このテレビの影響というものが、当然人びとの間で懸念されたり実感されてくるわけですね。また1964年にはオリンピックが東京で開催されて、テレビ番組が次々カラー化されてくる。現在テレビ放送がカラーなのは当たり前といえますが、テレビの放送に色が付いたというのは、これは当時としてはまったく画期的なことで、新聞のテレビ番組欄にですね、カラー番組の所だけわざわざ「カ」というようなマークがつくくらいでした。いずれにしてもそういうふうにテレビが普及してきて、子供はテレビにかじりつく、大人も在宅時間のほとんどをテレビをみているということになると、その影響が限定効果論というような小さなものなんだろうか、実際にはもっと大きな影響力を持っているんじゃないかという状況認識が生まれてくるわけですね。

一方、研究の面でいいますと、限定効果論というものを生み出した研究の経緯を振り返ってみると、刺激としてとりあげられたマスコミ内容というものが、人びとの態度だとか行動だとかそういうものをごく短期間のあいだに変えてしまおうという意図を持ったコミュニケーション、たとえば選挙の時の政党や候補者のキャンペーンだとか、新兵の教育だとか、あるいは新しい法律や制度を周知させるための啓蒙的なキャンペーンなど、いわゆる説得コミュニケーションでした。しかし考えてみれば、選挙期間中に新聞やテレビの政党キャンペーンひとつで、自民党の支持者を共産党の支持者に変えてしまうというふうなことは当然ありえないことです。そういうキャンペーンの効果を研究して、あまり大きな影響力がないよということを言っていたんじゃないかというふうなことで、マスコミ研究の方法にも反省が加えられるようになってきました。そしてもう少し長期間にわたる影響というものを、もっと腰を落ち着けて研究していく必要があるんじゃないかということから、たとえば子供に対するテレビの影響というものについて、息の長い研究が行われるようになってきました。

短期的な効果の研究から長期的な影響の研究へという視点の転換とならんで、もうひとつの流れは、政治的な意見とか政党に対する態度といった、人びとの心のなかである程度確立されている行動傾向を変化させるということだけがマスコミの影響力の全てではないだろう、という反省のうえに立ったものです。最初に清水先生の本の紹介をしたときにお話したように、自分が直接体験できない社会的現実というものを、報道を通じて知らせてくれるということがマスコミの重要なはたらきのひとつであるとすれば、我々の社会認識というか、環境認知といったものを形作っていくうえでのマスコミの影響力というものを見直す必要があるだろうというものです。たかだか一年やそこらの選挙キャンペーンで人びとの態度が変わらなかったからといって、それでマスコミの影響力が限定的だというのは余りにも一面的な捉え方だというわけですね。本来コピーの支配とい

ったかたちで懸念された、人々の環境イメージの形成に与えるマスメディアの影響力というものをもう少しきちんと押さえておく必要があるんじゃないのかといった問題意識の転換が、1970年代から現在にかけて、特にアメリカを中心に進められてきています。時間がありませんので具体的な研究例の紹介は省略いたしますが、いろいろなマスコミのテキストに書かれておりますので、興味のある人はそれをお読みになって下さい。一般に「議題設定」機能というふうによばれている研究領域です。

さて、今まではマスコミ研究といえばアメリカが中心であったし、研究者もアメリカでの動きを見ることが多かったわけですが、ここ20～30年の間にヨーロッパ、特にイギリスを中心にして、マスコミ研究の新しい流れというものが起こってきた。この流れはマスコミ研究だけではなくて、非常に大きな思想運動の一つなのですが、いわゆる「カルチュラル・スタディーズ」「文化研究」というふうに呼ばれている大きな思想の動きが、ヨーロッパを中心にごさいます。これは社会学・哲学一般に大きな影響力をおよぼしている動向ですが、このカルチュラル・スタディーズの考えをマスコミ研究に適用していくという動きが、イギリスを中心に起こっているわけです。

これも、残された時間がありませんので、ごく簡単に申しますと、まず、マスメディアから伝えられてくる内容というものは、初めから一定の意味がきっちりと確定されているものではなく、それに接した受け手がそこから色々な意味を読みとっていく素材としてのテキストなんだという、そういう前提に立っています。だからマスコミの内容それ自体は、多様な意味を含み、多様な解釈可能性を持っている。しかし、ここからはカルチュラル・スタディーズの一つの特徴なんですけれども、しかしそれは特定の社会的文化的な状況の中で作られたテキストである限り、多様とはいってもその社会の支配的なイデオロギーをどうしても反映せざるを得ない。つまり、ある時代、ある社会の支配的なイデオロギーというものがその中に込められている。これは否定できない。これはメディア産業というものを通じて、支配的な権力の意味が、そこにも反映してくる。これを優先的な意味づけと呼んでおります。しかし、さっき言いましたように、それが多様な意味を潜在的に含んでいるテキストである限り、受け手として、そのテキストを独自に読んでいく余地を持っている。つまり、その限りで受け手は能動的な存在ということになります。ただ単に受け身的にマスコミの内容に接触するんじゃなくて、自分独自の物差しといいますか、枠組みというものを持っているということですね。この枠組みは大別して、言われるままにそれを受け入れるという体制順応型の枠組み、おかしいなと思っても結局優先的な意味づけにしたがってしまうという妥協的な枠組み、そして、優先的な意味づけを否定して対抗的な読み方をする枠組みといったものが考えられています。ただいづれにしても、受け手がどういう読み方をするかということによって、一つのテキストの意味が変わってくる。それではそういう受け手の枠組み、これをコードというふうに言ってますけれども、そういうコードがそれぞれの受け手の中にどのように形成されるのかというと、それぞれの受け手が属する社会的文化的な特性というものに大きく依存している。ひとつの社会のなかには複数のサブカルチャー、たとえば、階級だとか、人種だとか、ジェンダーだとか、そういうふうな

様々なサブグループがそれぞれ形成しているサブカルチャーが存在しており、そのサブカルチャーは、マスコミ内容の意味を解釈する共同体と呼んでいいような機能をもっていて、そこに属する人びとのコードを作りあげている。ちょっと大雑把すぎたかもしれませんが、こういう考え方がカルチュラル・スタディーズのマスコミ研究の骨組みだといえます。

こうみてきますと、かつて私がマスコミ研究を始めた頃の、マスコミの力に対抗するものとしての集団的サポートという考え方、つまり、サークル運動だとか、あるいは歌声運動だとか、勉強会だとか、そういう小集団活動が個々人の体験を共通化し、マスコミの虚偽をあばいて正しい現実を認識するための力になるんだという、そういう考え方とどこか似ているような気がしてきます。ただこれは私だけの思いこみかも知れません。最初の出発点がそういうものであっただけに、いろいろなものをそれに引きつけて解釈してしまうのかも知れません。しかし、率直に言ってそういう感じを持っています。

## 5. 若い人たちへのメッセージ

以上、あっちにぶつかりこっちに迷い込みながら、40年間にマスコミ研究者としてたどってきた道をお話ししてきたわけですが、お前の40年の研究は1時間ほどの話で終わっちゃうのかと言われますと大変恥ずかしい限りです。最後に感想めいたことを2点ほど申し上げたいと思いますが、それが皆さん特に若い人たちへのメッセージになりうるとすれば幸いです。そのひとつは、私がマスコミの研究をし始めた頃は、自分が勉強していること、あるいは研究者仲間の研究していることが、社会一般の人たちの関心だとか、悩みだとか、憂いだとか、怒りだとか、そういうものと何か響きあっているという実感を持つことが出来たように思います。自分の今の研究はこういう人たちに支えられているんだ、こういう人たちが考えていることを自分はもう少し厳密に、体系的にやっているんだというそういう実感が、これも勝手な思い込みかもしれないがありました。そういうナイブなんだけれども、お互いに響き合うような実感が、どうも現在のマスコミ研究全体とは言いませんけれども、私のやっている効果だとか影響の研究の分野では希薄になっているような気がしています。確かに学問的に精緻にはなってきたけれども、一般の人たちの悩みや怒りや苦しみというものから遊離して、上滑りしていくおそれがありはしないかということを恐れております。みなさんももし研究をしたり、本を読んだりする時には、沢山の人びととつながっているという実感を大事にしていきたいと思います。

それからもう一つはですね、先ほどの新しい動きの中で紹介するつもりだったのが、時間がなくて省略してしまったのですが、世論の形成のされ方を研究したドイツの学者の本の中で、ひとつの社会で多数意見がどんどん大きくなっていき、少数意見がどんどん小さくなっていってしま

うのは、人は自分の意見が少数だと思うと、敢えて公の前でそれを表明するのをためらってしまい、反対に自分の意見が多数意見だというふうに思っていれば、声高にいろいろなところでその意見を積極的にしゃべろうとするからだと言っています。そうしたことがどんどん相乗されて、あるいは悪循環となって、多数意見はますます多数となり、少数意見は沈黙を迫られていくんだというわけです。ただその同じ本の中に、これはあまり一般に重視されていないんですけれども、自分の意見がどんなに少数意見であるとわかっていても、そして多数意見が優勢になっていっても、自分の意見を人前で敢えて公表する、そういうハードコアというふうに呼んでいますが、ハードコアが存在するんだ、そしてこのハードコアは、その時代に通用しない頑固者でやがて消えゆくものかもしれないけれども、しかしそれが社会変動の先駆的な原動力になる、ということもあるんだということを、論文全体の中ではそれを強調しているわけではないんですけれども、そう述べている箇所があります。何時でもどこでも事あるごとに自分の主張を貫き通すのに躍起となる必要はありませんけれども、これだけは譲れないというものを持って、そしてそれだけはどんなに多数意見が大きくなろうと、それを曲げないという信条を持ち続けていただきたいということです。

長い時間聴いていただいて、本当に有り難うございました。これで私の話を終わります。